文部科学省認可通信教育

ON AIR

NO. 105

放送大学通信 オン・エア
発行月 2012年3月
発 行 放送大学
〒261-8586 千葉市美浜区若葉2-11
043-276-5111(総合受付)

CONTENTS

情報コース・情報学プログラムの新設について …… 1
コース別座談会 …… 3
退任のあいさつ …… 7
Voice of Students 第5回 …… 8
2012年度開設改訂科目紹介 …… 12
研究室だより …… 16
トピックス …… 17
学習センターだより …… 18
インフォメーション …… 20

2013年度新設

情報コース・情報学プログラムの新設について

ICT活用・遠隔教育センター長
教授 川合 慧

放送大学では、豊かで充実した生涯学習の実現を目指して、教養学部教養学科に5つのコースを設けて教育にあたってきました。さらに、単なる学習の範囲を越えて積極的に研究を行なう人材を養成するために、文化科学研究科に6つのプログラムを設けて、諸方面諸分野に対する知的探求の実現を支援してきました。これまでにも学部・大学院から多くの修了生を出し、高度で幅広い学習と研究を実現できていると考えています。このたび、2013年度からこの体制に加えて新たに情報コース（学部）と情報学プログラム（大学院）とを設置し、学習と研究の体制を一層充実したものとすることに致しました。

これまでにも様々なコースやプログラムで、「情報」に関する事柄が扱われてきました。科目名で見ただけでも、情報と社会、情報行動論、情報システム科学、博物館経営・情報論、ことばと情報、といったように、沢山の科目が提供されています。さらに、科目名には現れないにしても、非常に多くの科目が何らかの意味での「情報概念」を取り扱っていますので、情報というキーワードが出現する頻度はますます高まってきています。このような中で「情報」そのものに重点をあてて行なわれる学習・研究とはどんなものなのでしょうか。

仮想的な学習題目として「世論形成と情報メディア」といったものを考えてみましょう。この題目はいわゆる社会論の分野に入ると思われますが、情報メディアに着目している訳ですから「情報」とも強く関係していることは間違いありません。それではこの種の学習も「情報」の枠内で行なうことになるのでしょうか。それを判断するキーワードは「モデル化」です。モデル化とは、自然現象でも社会現象でも、あるいは人間の行動の様子でもいいのですが、考えている対象を「着目すべき側面」から観察し、「その他の側面」はできる限り捨象して、可能なかぎり単純なシステムとしてとらえます。そしてその上で、様々な性質が現れることを説明し、今後についての予測を試みます。このモデル化がある程度まで可能であれば「情報」の枠内で扱うことができます。

さて「世論形成と情報メディア」に対してモデル化を試みるとすると、まず「世論」の正確な定義が必要ですが、これは非常に難しそうですね。ある事柄についての賛成・反対の意見と言ってもいろいろな方向に幅広く拡がっているので、一筋縄では行きそうにありません。情報メディアについても同じで、どのようにどれくらいの浸透度があるかについて正確なことを調べることは事実上不可能です。つまり、この学習あるいは研究を、モデル化を正攻法的に考えて扱うことは不可能なのです。

一方この項目では、モデル化を考えるのとは別のやり方で、さまざまな事例の積み重ねと状況の適度な単純化及び複合化とを繰り返すことで、全体像をかなり明確に描き出すことができるのです。これとは別にいろいろな状況の単純化を繰り返すことでモデル化の手法を適用することもあります。たとえば、社会を10〜20ぐらいのグループに分割し、それぞれの間での影響の及ぼし方を数値化した上で、ある問題についての賛否の分布が時間とともにどのように変わってゆくかを数値実験によって明らかにする研究が、実際に情報分野での修士論文研究として行なわれています。

ここでの例は社会学的なものでしたが、心理学や教育学、言語学や環境関連の学問で扱う項目についても、同じような状況であるとお考え下さい。さらに、モデル化が重要な要素である自然科学では、モデルに基づく予測と実際の実験結果や観測結果とを比較することによって、そのモデルの妥当性を議論してゆきます。これに対して情報分野では、既存の現象や対象を説明するための、できる限り単純明解なモデルを考案することに重点を置きます。さらに、既存の対象にとどまらずに、これまでには存在しなかった新しいシステムを構築し、人間や社会に適用してゆくことも目的としています。たとえば携帯端末は、固定電話における「電話をかける」、「電話を受ける」、「電話線という通信路」をモデル化し、それに代わる無線による通信路を考案することで実現されました。さらに、利用者の行動や要求をモデル化することによって、短縮ダイヤルや電話帳、画像や映像の送受信、さらにはインターネットの利用までを可能とする端末が実現しています。このような例で、情報分野におけるモデルの扱い方を理解して頂ければ幸いです。

以上述べましたように、情報の分野では、問題をどうとらえるか、どうモデル化するかが勝負であると同時に、それまでには存在しなかったモデルを作り分析ができた時の喜びや満足感を味わうことができるのです。最後に，これまでに他のプログラムの中で行なわれてきた情報分野の研究題目のごく一部を挙げて、新コース・新プログラムでの学習と研究のイメージを描いて頂けたらと思います。

- **名画は名曲を演奏できるか ── 画像音曲変換システム**
- **医療情報システムの相互運用の研究**
- **ネットワーク通信を介した制御系の安定性解析**
- **テレワーク推進による生産性向上とリスクに関する研究**
- **Webページ閲覧の利用者視点と行動の分析**
- **情報媒体としての紙の将来**
- **統計力学的情報処理の精度と計算量**

自然科学と社会

コーディネーター:
松本 忠夫教授(生態学・環境生物学)
海部 宣男教授(天文学)
熊原 啓作教授(数学)
濱田 嘉昭教授(物理化学)
米谷 民明教授(物理学)

あの「3.11」から1年。地震予知のあり方や原発事故とその後の対応等を巡って、自然科学と社会との関係が改めて問われています。コース別座談会第3回は〈自然と環境コース〉の先生方にお集まりいただき、自然科学とは何か、現代社会との関わりはどうあるべきか等についてお話していただきました。※本文中は敬称略とさせていただきました。

本や先生との出会いから自然科学の道に

松本　本日は「自然科学と社会」というテーマで話を進めてまいります。まず皆さんは、どういうきっかけで自然科学の道を志されたのでしょうか。

米谷　『学習年鑑』でしたか、小学3、4年の頃Xmasに買って貰った本に“アインシュタイン”が出ていて、鮮明に脳裡に焼き付いた。中学では実験に夢中で、高校では急に理論的なことをやりたくなって…そんな折り、偶然本屋さんでアインシュタインの講義を記録した『相対論の意味』という本を見つけ読んでみたところ、何かわかったような気がしたのです。これなら自分も少し“アインシュタイン”に近づけるかな、と。

米谷 民明教授

海部　私も小学４年の時に買って貰ったぶ厚い科学シリーズの本がきっかけです。その中の『自然界の驚異』と『天体と宇宙』はボロボロになるまで読みました。そして“自然”にとり憑かれた。谷ができる、海ができる、山ができる…どうやってできるんだろう。石を拾えばそこにある結晶…どうしてこんなきれいな面ができるんだろう、と。そんな自然を不思議に思う気持ちはずっと持ち続けていて、大学院で初めて天文学―宇宙を研究しようと決めたのです。広い、謎は尽きないはずだ、と。

濱田　私も小学生の時に『大昔の日本』という本、“室戸台風”の話の本を買って貰いました。自然というのはすごいもんだと感動しました。ところが小学5、6年の頃、「エベレストも昔は海だった。証拠に貝殻がある」という担任の先生の話に大反発しました。8千m級の山が海底から盛り上がってできたなんて絶対信じられませんでした。そんな自然にまつわる驚異や疑問が常に頭の中にあって、いつの頃からか“自分の手”で調べようと考えてきました。

熊原　高校で歴史に興味を抱き進路の選択肢の一つでしたが、たまたま数学の本に出会い、全然理解できないけど面白そうだと思ってしまった。それでも数学を職業にするなんて気はなく、でも気づけばその魅力にひきこまれていてもっと勉強したいと…。

松本　小学校高学年の夏休みの宿題がきっかけです。昆虫採集と標本作りに夢中に。中学では生物部に入り、高校でも標本作りに明け暮れた。その勢いのまま大学も即、生物学科に。思えば、あの頃からずーと将来昆虫を研究したいと思っていたようです。

海部　子どもの頃の経験って大きいですね。特に本や先生との出会いが…。

教材と面接授業にこだわる

松本　いかに教育が大事か、ということですね。それでは、教える側として、放送大学の教員として指導されている中で、工夫されている点についてお話を。

熊原　放送大学の学生の幅はとても広い。そのため全ての学生の皆さんを惹きつける授業づくりというものに苦労していますが、数学という学問はある程度“積み上げ”がないと面白みというものが出て来ません。ですから、最初のうちはとっつきにくい所もあるけれどそこを堪えると面白くなる、ということを伝えるようにしています。

濱田　学生の皆さんは、社会経験を積まれている上に興味旺盛です。そんな方々にどういう教材を提供すべきか。放送大学にしかできない教材を、と努力しています。また、生涯教育というとレベルは易しくと考えがちですがそれは違う。幅広い学生の皆さんの負託に応え、通常の大学の教養課程以上のレベルのものを作ろうという思いは放送大学の先生に共通しています。

海部　学生の皆さんは社会人で、常識はたっぷりもっておられる。ですから、通常の大学生に対するものとは違った様々な切り口を用意して科学の面白さを伝えるようにしています。もう一つ、放送大学の学生の方々は社会のリーダー格でもあります。そういう方々に、自然科学の教養というものをどう身につけていただくか、ということもずっと考えながら講義しています。ただ、放送授業だけでは不十分で、そこを補って余りあるのが面接授業でした。何と言っても顔を見られない、というのは隔靴掻痒（かっかそうよう）の思いでしたから。放送と違い、面接授業はその都度新しいことを話すこともできます。直接学生の反応を知ることも、講義づくりに役立ちました。

米谷　こちらに来て2年ほどですが、4科目執筆しました。皆さんが言われたような学生の方々からの様々な要求に、高いレベルで、かつ分かりやすいものをと努力していますが、私自身が得るものも大きいですね。物理学を学びたいという人の中にはアインシュタインが何をやったか、相対性理論を知りたいという人も多いです。そこで、面接授業では、『特殊相対性理論』の日本語訳を教材にゼミ形式で授業を行いました。討論形式での授業はこれまでなかった、新鮮でよかったとの感想をいただき、これからも色々な機会にやりたいと考えています。人数を25人と制限していますが、物理や数学の基礎的な力を持たれず参加される方、片やもっと先までと要求される方と様々です。質問にはなるべく丁寧に時間をかけて答えるようにしています。

熊原　数学の面接授業では、基礎力のない方にも実感として理解できるよう身近な事例を入れて授業を組み立てていますが、最後の1、2回だけは、少し進んだことを。すると、難しくて理解できなかった、との評価をいただく一方で、数学が数学の中だけに閉じていないことに気づかされた、社会や自然に非常に関連していて重要なものであることが実感できた、わかったからにはこれからもっと勉強したい、といった感想もたくさんいただきます。

松本　それはすばらしいことですね。やはりある程度の基礎力は必要で、それがあるとさらに世界は広がる。そういう知の探求のエンジンとなるのはやはり、不思議だ、と思う気持ちではないでしょうか。私の専門の生態学では、生物特有の不思議を実感していただくために、私は映像にこだわっています。フィールドの映像ロケは、海外でとか、国内では沖縄、北海道などへ行って、また自分でも撮影し提供しています。さて、今それぞれの分野でのお話をしていただきましたが、自然科学とは、という基本の部分で、海部先生と退職された星先生を中心にして作られた基礎科目「自然を理解するために（'12）―現代の自然科学概論―」が4月から開設されます。海部先生、ご説明いただけますか。

松本 忠夫教授

海部　自然科学の先生方はみなさん同じ思いだったと思います。つまり、学生の皆さんには各分野を勉強する前に、自然科学の概論的かつ包括的な括りの理解がまず必要ではないか、と。そこで全分野の先生方のご協力を得て、現代の地球市民はどういうふうに科学を理解すべきか、という基本的な所を学んでほしいとの願いから作ったのが、この「自然を～」です。最初の1／3は、自然科学とは何か、その成り立ちや方法、歴史も含めて講義しています。次の1／3は、各分野の特徴と概要を、各先生方がお話されている。最後の1／3で、現代社会の中での科学の問題点や可能性について考察しています。具体的な内容については本誌の科目紹介（P12）をご参考いただくとして、私たちとしては分野を問わず、ぜ

ひ受講していただきたいと思っています。

濱田　私も1章を担当させていただきました。化学は、原子・分子といったミクロを探求するものですが、扱う対象は例えば「水」といったマクロのものです。ミクロの分子の形と性質を考えながらマクロの物質を扱う、いわば右手に望遠鏡を、左手に顕微鏡を持って研究するという特徴があります。ものの見方の一つの典型的なフィールドが化学であることを「水」を使って説明しています。

濱田 嘉昭教授

熊原　自然科学の推進には数学が必要です。そのため数学は“道具”扱いされることがありますが、必ずしもそうではない。純粋に数学論理で組み立てたものが後々思わぬところで利用される例が多い、ということと、自然科学や社会科学との、最近ではコンピュータ科学などとの交渉を通じて数学は幅広く深く発展し続けている、ということを話しました。

米谷　私も生井澤先生担当の1章にゲストとして、「力とは何か」や最先端の話題について話をしました。

海部　自然には、非常に多様であるという面と、一方でその多様性に通底する法則の面があります。その両面を含めて自然を知り、理解していく作業が科学であって、自然は知れば知るほど深くて面白いものであることを、ぜひ伝えたいですね。今の私たちの社会は、科学を抜きにしては考えられません。科学というものを日常生活の中に取り入れて、未来に向けての判断力を培ってほしい。それが、我々一同の願いです。

「知るための科学」と「社会のための科学」

松本　そうですね。学生、市民の皆さんが現代社会を生き抜く上で、なるべく自然科学の素養を持たれることを私ども教師としては願って止みません。一方で、3.11以降、なぜ地震予知できなかったのか、どうして安全神話が拡大し、原発事故が起きたのか、といった、我々科学者に対してたいへん厳しい目が向けられています。自然科学者の社会的責任についてどのように考えたらよいのでしょうか。

濱田　大きいのが来るという地震予知はあった。その受取手──社会の側にそれをどう汲み上げるかといった議論が不十分なまま、地震は起きてしまった。確かに何百年に1回という精度は問題ですが…。

海部　そもそも地震に「予知」という言葉を使ってよかったのか。地震予知と言えば莫大なお金が出て、研究者たちがそれに群がった、というのは事実です。他方、社会は「予知」といえば○月○日にどこそこで、とまで言ってくれると期待してしまう。そんなの実際にはできない、と専門家たちは百も承知。だから「予知」という言葉を使うのはやめよう、という議論も、以前からあったのです。しかし、日本ではマグニチュード9クラスの地震は起きない、と専門家たちは自らの言葉で公言し、それに基づいて防災計画も作られた。だから科学者の責任は、非常に大きい。ただ、全てを科学者の責任にするのはどうでしょうか。このような問題を扱う時、私は3つのポイントを考えます。一つは、科学者の姿勢の問題。科学者は自らを科学的に律し、社会にできる限り科学的に適正な発信をしなくてはいけない。第二は、それを受け入れる社会の体勢の問題。日本は科学者の提言を政策にしっかりと反映させていく仕組みが、先進国中で最も貧弱です。第三は、市民一人ひとりの科学的判断力。例えば放射能の問題でも、過度に恐れてしまっては身動きがとれません。事故以前の自然が持つリスクと事故後のリスクというものをどう比較するか。そこにはある程度の科学的判断力が必要です。日本では残念ながら、この3つとも不十分と言わざるを得ません。

熊原 啓作教授

熊原　体内被曝（ひばく）にしても、非常に危険という科学者とこの程度は大丈夫という科学者がいて、それぞれ何を元にして言っているのか。その出発点の食い違いをそのままにしているので議論がかみ合わない。

濱田　事故解説の多くは、○○ミリシーベルトがどうだ、○○ベクレルだから危険だというものばかりです。生命に危害が及ぶとすればどういう理由でという説明がありません。被曝するということは、体の70％の水分をイオン化して活性酸素ができるということです。それがどれほど増えればどう危険なのか。回り回って生命の仕組み、DNAにどういうア

タックをするのかということを言わなくてはならないのに、その分野の、生物学とか医学の人の解説が圧倒的に少ないと思います。関連分野と連携せず放射能の話だけが一人歩きしています。こういう発信のあり方を科学者は改めるべきです。

海部　社会と科学の関係は、なかなか難しい。遺伝子組換え食品の問題も、専門家の間では大丈夫という意見が大勢、でも社会には不安がある。BSE問題も然りで日本の防疫体制はあまりに過度と言われるが、社会は変更を拒んでいます。放射能問題も、本格的に研究され始めたのはチェルノブイリ以来のことですし、残念ながら科学で解明し切れていない部分がまだまだある。それを踏まえて、社会は何をすべきかという適正な提案と施策がなされるべきですが、そういうシステムを、日本は強化すべきです。

濱田　約10年前にダイオキシンが大問題になっていました。でも、死んだ人はいないし病気になったとも聞いていない。実は化学者の間では、ダイオキシンはすでに我々の体内に相当量あり、問題となった量はごく微量、それほど危険ではないと分かっていました。でもマスコミや環境団体を怖れて口を噤んでしまった。放射能でも同じようなことが言える可能性もある訳です。天然にあるカリウム40は放射性を持っており、内部被曝最大の要因です。どの位の線量がどういうメカニズムでどの程度人間の生命に関わるのか、定量的な研究はないというのが実情です。

熊原　科学者の社会的責任というものは、原子爆弾に関して俎上にあがってから未だに引きずっています。純粋に知的好奇心だけで研究を続けていいのか、は科学者共通の非常に悩ましい問題です。

松本　日本の科学者が、過度の研究費獲得競争に追い込まれ、様々な歪みを生んでいる点も問題ですね。政治家があまりにも自然科学をわかっていない。

米谷　コミュニケーション力…科学者の社会的責任の一つと思いますが、目前の研究を進めることだけに終始して、その位置づけや周囲との関係をきちんと社会に伝える、そんな意識が希薄なような気が…。

海部　学者の国会と言われる日本学術会議は有意義な勧告を毎年出しているのですが、それを政府が取り上げるというケースが少ない。会議の成果が行政の中にきちんと位置づけられれば、議論はより真剣に活発になるのですが…。では、現実はどうか。政府は適当な研究者をピックアップして委員会のメンバーにします。原子力安全委員会などは典型で、政府にとって都合のいい人が入ります。その人には研究費が回るという、甚だよろしくない循環が起きている。

海部 宣男教授

松本　跳梁跋扈（ちょうりょうばっこ）する御用学者、というところでしょうか。最後に科学と技術の関係について。「科学技術」という言い方はよくない、との意見があります。

海部　「科学技術」という言葉は、「知る」科学と「創る、役立つ」技術を混同させている。日本では、科学は役に立つ、役に立たないのは科学ではない、といった見方が蔓延した。日本学術会議では「科学・技術」「科学と技術」という使い方にすべきと警鐘を鳴らしています。科学と技術は違うものですが、互いにお互いの役割を通して発展すべきものです。

米谷　日本では、科学を結果だけで伝える傾向があり、応用としての技術と関連づけて語られやすい。ただ、昨今のニュートリノを巡るニュース等に接していると、物理学を科学そのものとしての興味で結構深いところまで知りたいという欲求も一般社会人にあるんだな、と感じています。その一方で、風評被害のようなことも起きています。その中間を埋める作業──何がどこまでわかって何がわからないのか、そのための科学的な判断力を補うのが、先ほど言った科学者の持つべきコミュニケーション力だと思います。

海部　そこに放送大学の役割もあります。学生の皆さんには、社会と科学をつないでほしいですね。今日、科学には「科学のための科学」つまり「知るための科学」という本来の側面に加えて、「社会のための科学」といった側面が強く期待されています。私は入学式で学生の皆さんに「ここで科学を勉強したら、その成果を社会に還してほしい」と申し上げています。社会の中に科学を浸透させていく──放送大学はとてもいい媒体だと思います。

松本　時間となりました。議論を重ねる中で、改めて私たち自然科学者の立ち位置というものが確認できたかと思います。本日はありがとうございました。

退任のごあいさつ

退任にあたって

生活と福祉 教授
生活健康科学プログラム
本間 博文

9月に新装なった東京文京学習センターに早速ゼミの予約を入れ訪れました。期待以上の施設です。共通部分がゆったりととられ、各講義室、ゼミ室の雰囲気も上々。各地で地元の大学と合築した学習センターを見てきましたが、東京文京学習センターの建物は規模や設備や雰囲気といった点で出色の出来映えです。27年前のことになりますが、放送大学着任時に東京文京学習センターに配属され、1998年までこのセンターに所属しておりました。その間1989年に教授に昇進し、1992年から6年間はセンター長でした。東京文京学習センターが私の放送大学での活動の基盤だったのです。その数々の思い出が残っている古い東京文京学習センターは解体され新しいセンターに衣替えしたことは喜ばしいと同時に私の放送大学での役割も終えたのだと、そんな想いに捕われます。放送大学にとって開学以来の約30年間は放送メディアを駆使して新しい高等教育の可能性を実証するための時期だったように思います。それはある程度実現したといって良いでしょう。これからは放送大学が「世界に冠たる教養教育の府」としてどのように変身していくのか、ちょうどBSに参入して学生以外の多くの国民が放送大学に接する機会が増えたことでもあり期待が高まります。

共生と学習の意味を学んで

社会と産業 教授
社会経営科学プログラム
仙田 満

2007年より5年間、放送大学にお世話になりました。また学生の皆様には私の科目、授業を受講いただき、ありがとうございました。「環境デザイン論」「都市環境デザイン論」「産業とデザイン」の3本を科目として担当いたしました。長い間の大学教員生活の最後に、映像による講義としてまとめる機会をいただいたことに深く感謝したいと思います。さまざまな学びも発見もあり、私としてはとても充実した5年間だったと思います。「環境デザイン論」は私のワンマン授業でしたが、「都市環境デザイン論」「産業とデザイン」でそれぞれ一緒につくっていただいた先生方との議論は充実したものでした。現代は共生、学習がキーワードだと考えています。助けあい、刺激しあいながら、学習し続けること、挑戦し続けることを多くの放送大学の学生、教員の皆さんから学ぶことができました。さらに受講者のみなさんも、又大学も共生と学習の意味を発展されることを祈ります。ありがとうございました。

後ろ髪をひかれて

人間と文化 教授
文化情報学プログラム
本多 俊和
（スチュアート ヘンリ）

振り返ってみれば、放送大学での8年間は、あっという間に過ぎてしまいました。暖かく支えてくれる同僚と有能な学生に恵まれ、そして海外などでの調査をふんだんに行うことができて、我が人生において最良の日々であったと言っても過言ではありません。調査の成果を興奮さめやらぬうちにそのまま毎月のゼミで学生にぶつけることができたのも、とてもいい修行でした。狭い研究室でしたが、南は沖縄、北は北海道から学生がよくぞ集まってくれました。そのときの熱い議論と学生の真摯なまなざしは、つねに研究の原動力となりました。

一方、最初の放送授業収録の緊張感はいまだに忘れられません。学生が一人もいない「教室」は異様な雰囲気でしたが、幸い、厳しいが思いやりのあるディレクターにめぐり会えて、放送授業制作ががおもしろくなりました。しかし、もう作れないと思うと、寂しい限りです。

放送大学での5年を終えて

自然と環境 教授
自然環境科学プログラム
海部 宣男

国立天文台後の職場に放送大学を選んだのは、科学と社会のより良い関係を考え、実践もしてみたかったからでした。その点、社会教育·教養教育を掲げた総合大学である放送大学はユニークで優れた場所と思います。学生さんの勉学への熱意には、頭が下がります。特に超高齢社会に入った日本では、この熱意と意欲は貴重です。加えてTVによる広範な授業提供、及び全都道府県に拠点を持つ全国展開も、極めて大きな特質です。この3つは放送大学の宝で、大事にしたいものです。

多くの方々との協力で制作した講義は、「自然科学を理解するために」「宇宙を読み解く」「太陽系の科学」「進化する宇宙（部分改訂）」「宇宙·自然システムと人間」の5つです。基礎から大学院まで、宇宙天文分野のカリキュラムがほぼ出来上がりました。「宇宙を読み解く」「太陽系の科学」の放送授業では、科学未来館の科学コミュニケーターの方々から公募で選びアシスタントをお願いしました。放送授業の多様化にお役に立てたと思います。月一度の大学院ゼミも、楽しいものでした。同僚の先生、学生さんたち、スタッフの方々に感謝です。私は大学院の入学式で、「頑張って学ぶとともに、その成果を社会に還元して下さい」と挨拶してきました。放送大学の学生さんには、それができる社会的経験があると思うのです。

Voice of Students

Vol.5

在学生・卒業生の声をお届け

今号の声　放送大学で学ぶ外国籍の仲間たち

放送大学には、多くの外国籍の学生がいます。今回は出身国や年齢、性別が違った在学生の方々にインタビューを行いました。放送大学で、学ぶ理由や、放送大学で学んだ後、どのような夢があるのか、それぞれの方にうかがいました。

case 1

放送大学で学んだ経験を活かし、将来は、日本とインドネシアの架け橋となるような役割を果たしていくのが夢ですね。

インダーメイディアワティさん
出身国/インドネシア
全科履修生（産業と技術）
東京世田谷学習センター

私は、現在インドネシア大使館に勤務しながら放送大学で学んでいます。日本との出会いは、子供の頃、外務省で働いていた父とともに日本で4年間ほど暮らしていました。日本の生活にもすぐにとけ込み、アニメなどの文化にも触れ、日本に好印象を持っていた記憶があります。一度インドネシアに帰国。高校卒業後に現地企業に就職し、後に、丸紅に勤めることに。日本企業で働くためのマニュアルや仕事のやり方を教えていただき、技術者の方々からも多くのことを学ばせていただきました。その後、インドネシア大使館で働く機会をいただき、当時の上司の方；ユスフ・アンワル大使閣下が大学教授だったこともあり、「生きる事は学ぶ事、そして日本滞在中、様々な知識を得る方がいい」という教え、また理解を示してくださり、放送大学で学ぶチャンスを得たのです。放送大学は、学ぶ時間の制約がなく、自分のペースに合わせて学べるので、私の望むスタイルにピッタリでした。「大使館」という職場の人間として、インドネシアから来られた方々から、「日本ではどうなの？」という視点で、様々な分野の問題についてご質問を受けることがたくさんあります。そのため放送大学での学習は、分野を絞り込むことなく、幅広い視野で、体系的にものごとを関連づけて考えられるような科目の選び方をしています。興味のあるものはいろいろ学んでみたいと思っています。今までにも、「労働経済」、「21世紀の女性と仕事」というような労働問題や、「途上国の開発」なども選択しました。日本における外国人労働者の問題にも注目しています。たとえば、インドネシアで看護や介護の分野で仕事をしていた実績をふまえて日本に来た方々も、日本で定められた「資格」を取得していないために、現場ではアシスタント的な仕事しかできないなど、労働の国際化の壁が、現実には多々あるのです。そこで私は「基礎看護学」、「看護学概説」や「在宅看護論」の科目をとる決心になりました。また、神戸の震災を経験したこともあって「都市と防災」についても学び、今回の東日本大震災についてもい

ろいろと考えました。今期の科目には、「エネルギー」について学ぶためのものを選択。「資源」や「原発」についても関心があります。インドネシアでもエネルギー問題は重要課題ですし、地熱の利用なども今後のテーマですね。こうしたことを、幅広い科目を学ぶことで、関連づけて考えられるようになるのがとても役に立ちます。同じニュースを見るにしても、見方が変わりますね。「この問題は、他のあのことにも関係しているな」とか、「経済や歴史のこんな面から起こっているんだな」というように見ることができるようになりました。今の私の目標は、日本とインドネシアの架け橋になりたい、ということです。日本で学んだ経験を活かし、その先の大きな夢として、私もいつの日か、「先生」になって、次の時代を担う人たちに、自分が得たものを伝え、教えていけたらと、願っています。

case2

日本人の妻の影響で、放送大学で学び始めました。今後は、面接授業に参加し、学ぶ仲間と交流を持ちたいです。

ボズウェル ポールさん
出身国/アメリカ
選科履修生
千葉学習センター

千葉に18年間住んでいます。

2年前に定年退職になってからはいろいろ仕事を探しています。

放送大学で学ぶ理由は、

・日本語の能力を高めたり、日本文化をより理解したりするため
・日本人の友だちを作るため
・妻と放送大学で学ぶ経験を共有できるため
・精神的に活発であるため
・日本で暮らす他の外国人と知り合ったり、その人たちの考え方を知ったりするため

などです。

学ぶうえで難しかったことは、放送授業だけでは先生や他の学生となかなかコンタクトがとれない点です。授業の内容・構成は面白く、課題や単位認定試験にも挑むことができましたが、こちらからのアクセスに対しては扉が閉じている感じがしました。

私は、最初、数年前に放送大学で勉強し始めた日本人の妻によって放送大学を知りました。彼女は、放送大学を卒業し、そして次に修士課程も修了しました。彼女の達成に非常に感動した私は、自分も放送大学の学生である経験をしたくなりました。

そして、「日本語基礎A」「日本語基礎B」、さらには心理学や哲学系の科目にも挑戦しました。自分の親しみのある分野ではありましたが、実際の内容は深く新しく、決して容易ではありませんでした。質とレベルの高さに、自分の甘さを実感しました。それでも良い成績を得られたことは大きな自信になりました。

私の日本語の勉強、日本語での勉強はまだまだ続きますが、できることなら外国人学生向けの印刷教材の導入を望みます。

今後は面接授業に参加するなど、先生や他の学生と交流を持つ機会をさがしていくつもりです。放送大学もインターナショナルな学生を受け入れる器を大きくして行って欲しいと思います。そのためにできることがありましたら、いつでも協力しますのでお知らせください。

case3

もう一度、日本の大学を卒業するという夢を叶えたいです。卒業後、母国の学校で、心のケアをする仕事に就くことを目標に頑張っています。

チャン ホンキーテイさん
出身国/ベトナム
全科履修生(心理と教育)
千葉学習センター

私は高校生の頃に、教科書に載っていた日本のことを知りました。先端技術や日本人のまじめな働き方の陰で、戦争後、日本は素晴らしく発展したという内容でした。それで、私は日本に憧れ、いつか日本に留学したいと思いました。しかし、貧乏な小規模の農家に生まれ育った私にとって、留学は遠い夢のようでしたが、高校の校長先生の推薦で「ドンズ」と言う日本語学校に入学することになりました。この学校での成績が優秀だったら、日本に留学できる。ただし、留学先でアルバイトをし、学費や生活費などを支払いながら勉強するということでした。日本の留学生活はきっと大変だろうと思いましたが、大変な状況を乗り越えられるからこそ、自分がもっと成長できると信じました。だから、私は日本に留学することを決めました。

そして、盛岡での日本語学校を卒業してから、宮城大学に合格し、入学しました。しかし、大学2年生になった頃、交際相手との間に赤ちゃんができ、やむを得ず休学をしました。一年後、子どもが産まれて状況が落ち着いたら、復学するつもりでした。しかし、小さな子どもの世話をするだけで、頭がいっぱいになり、時間的にも経済的にも困っていました。復学し、きちんと日本の大学を卒業する夢を叶えたい気持ちがいっぱいありましたが、困難な現状からなかなか抜け出せませんでした。そんな時、放送大学のチラシに出会いました。これだ！と思い、インターネットでもっと詳しく調べ、通信教育なら自分なりに時間が調整できるし、学費も普通の大学に比べたら、安い。これなら、私は子育てや家事などと勉強を両立できると思い、放送大学に入学することを決めました。

困っていた私にとって、放送大学に出会えたことは私の人生の中でとても貴重なチャンスで、失望していた私にはまた目の前に進む道が見えました。今度こそ、勉強を頑張って、夢を叶えたいと思います。現在、子育てをしながら、「心理と教育コース」の勉強を張り切っています。

母国のベトナムでは、学校には、保健室やカウンセリング室のような生徒の精神的支えになる施設などは全然ありません。先生たちも専門のことを教えるだけで仕事がいっぱいになり、生徒たちの悩みごとなどに気を配る余裕がありません。逆に、先生の一言で、先生が知らないうちに生徒に傷を付けることになってしまいます。私も、私の友だちの何人かもそうだったのです。だから、私の今の夢は、放送大学を卒業し、心理と教育コースで専門知識を身につけ、帰国後、学校で生徒たちの精神生活を支える存在になることです。今はベトナムの学校にはそういった施設がありませんが、そこで自分が先頭に立つからこそ、やりがいのある仕事になると思います。現在、この夢に向かって自分なりに頑張っています。

case4

放送大学の学習を通じて、出会えた方々に感謝しています。

高木 ファビアンさん
出身国/ブラジル
全科履修生(社会と産業)
大阪学習センター

私は高木ファビアンと申します。日系三世で、日本在住歴は14年間です。

昨年10月ブラジルに帰国し、日本の商社等から依頼を受けた商材を、現地の企業と共に販路を築くビジネスをしております。

14年前の来日時には、私は全く日本語が話せませんでした。どうしても自分の祖国の文化を理解したい、また語学力をつけて仕事のキャリアアップをしたいという思いから、5年ほど公文式で日本語を勉強し、あらゆる日本語検定試験に挑戦しました。その後、日本の大学で勉強をしたいという目標を新たに持ち、放送大学に入学し世界経済を勉強しました。在学中は、週末大阪学習センターに通い、先生方の興味深い授業を聴講できるのが楽しみでした。また学習室で出会った仲間と先生を交えての交流も、今とても思い出深いです。このようなご縁から、現在は放送大学の東先生のご指導の下、ブラジルの放送大学設立のプロジェクトに参加させていただいております。

放送大学の試験課題は、意欲ある学生向けのカリキュラムとあって、とてもレベルが高いものでした。特に外国人である私にとって、日本語の論文は大変難しかったですが、無事パスできたときは達成感を感じました。

このように、直接コミュニケーションを取ったり、自ら異なる世界に興味を持ち踏み込んでいくことで知識を広げられたと実感しています。今後も、一見困難なことに思えることにもあきらめずチャレンジしていくつもりです。

最後になりますが、放送大学での学習を通じて出会えた先生方や仲間たちに、本当に感謝しています。今後とも貴校のご発展を心より願っております。

report

対話の重要性、留学生について特に!

東京世田谷学習センター所長　秋鹿（あいか） 研一

放送教材「生涯学習と自己実現、06」119-121頁（堀薫夫、三輪建二）を読む機会がありました。それによると、米国の教育学者リンデマンは既に90年近く前に主著「成人教育の意味」(E.C.Lindeman; 1926）の中で、「成人教育の本質は“生活の意味の探究”である」と述べています。「毎日の生活、あるいは職場の仕事に対して、自分の内なる意識との乖離（かいり）を洞察し、意味づける、さらに明日の社会的行動へつなげることである」と言っています。リンデマンは続けて、「このような成人教育の場では学生間、学生教師間の対話、討論が重要である」とも述べています。

成人教育は現在では生涯学習と言われていますが、90年経てもその本質が変わっていないことを、センターでの面接授業、学生との懇談を通じて感じます。面接授業のアンケート、授業評価8項目の中で、学生は（7）質問や議論のしやすい雰囲気があったか？に特別な反応をしています。他項目では「ほぼ満足」に評価が集中するのに対し、非常に満足、不満足の評価が授業により大きく異なって記され、関連するコメントも圧倒的に多いのに気がつきます。放送大学学生（少なくとも面接授業へ参加する学生）は知識を得るため（だけ）に来ているのではなく、語り、考え、変わろうとするために来ているのを強く感じます。

このことは、留学生についてさらに顕著であると、このレポートを読んで感じます。自分の人生を放送大学の中で変えようとしているように見えます。何人かの留学生から、もっと話したい、もっと（webなどで）交流したい、自分や母国を知ってほしい、と訴えられた経験を持ちます。私たち放送大学人はこれに応える必要があるでしょう。なぜなら、彼らこそ日本との（民間レベル）国際交流のキーパーソンになる人と思えるからです。

自然を理解するために('12)
−現代の自然科学概論−

放送大学教授（自然と環境）海部 宣男　放送大学客員教授 星 元紀

海部 宣男 教授

星 元紀 教授

科学とは何でしょう。役に立つというのは、結果にすぎません。科学とは、私たちが住む世界を「知る営み」です。人間は自分の世界を理解することで活動を広げ、文明を築き、繁栄してきました。現在では、私たちの毎日は科学を抜きには考えられません。いっぽう災害や環境など未来社会の不確定さは、市民一人ひとりが自然や科学の基本的な理解と判断力を持つことを迫っています。「科学は苦手」では済まない時代に、私たちはいるのです。そうした状況を踏まえ、放送大学の自然科学全分野の協力で制作したのがこの講義です。最初の5章では、自然科学とは何か、その意味と方法、歴史を概説します。次の5章では、自然科学各分野の特徴と概要を分かり易く紹介します。そして最後の5章では、現代社会の中の科学とあるべき姿を、公害、似非（えせ）科学、科学の危険性などを踏まえて考察します。この講義でめざすのは、現代の地球市民が持つべき基本的教養としての自然科学の全体像を学び、現代社会における科学とその役割を考え、未来に向けて科学的判断力を養うことです。理系・文系を問わず、多くの方がこの講義を学び考えてもらえればと願っています。

グローバル化時代の人文地理学('12)

大阪大学大学院教授（放送大学客員教授）小林 茂　お茶の水女子大学大学院准教授（放送大学客員准教授）宮澤 仁

小林 茂 教授

宮澤 仁 准教授

人文地理学は、複雑に変動する多様な世界に、空間や環境をキータームにアプローチする学問です。「グローバル化時代の人文地理学('12)」では、イギリス出身の人文地理学者、D.ハーヴェイが「時間と空間の圧縮」と表現した、人・物・資本・情報の流動の増大と高速化が、現代都市の構造や人びとの行動、さらに世界各地の環境や景観をどのように変化させているか、5名の講師が多角的に検討します。これに際し、空間統計データだけでなく、フィールドワークによる資料や、地形図、空中写真、衛星画像を分析しながら、地理情報システム（GIS）を各所で援用し、今日の人文地理学の可能性を示します。「グローバル化時代の人文地理学('12)」はまた、高度な内容を初学者にもわかりやすく説明することもめざしています。この講義によって、現代の人文地理学の視角やアプローチの方法を学ぶだけでなく、皆さんがもっている人文地理学のイメージが大きく変わることを期待しています。

市民社会と法('12)

放送大学教授（社会と産業）道幸 哲也　北海道大学大学院教授（放送大学客員教授）加藤 智章

道幸 哲也 教授

加藤 智章 教授

市民社会とは、近代民主主義の思想に基づき、自由対等な人間が合意を媒介に形成した社会といえます。行為主体として人間は、政治過程では国民としてあらわれますが、取引関係や家庭生活では市民としてとらえられます。わかりやすく言えば、日常生活が営まれているわれわれの社会といえます。

本講義では、この市民社会で発生する多様な法的な問題を対象にして、紛争の背景や利害対立の状況さらに解決の仕方を学びます。初学者むけの法学入門といえます。法律は小難しくてどうもと感じる方は多いと思いますが、ここでは、身近な法律問題を、法哲学、刑事法、民事法、労働法、社会保障法の5つの観点から取り上げて法律の諸相を考察します。

法律は、対立構造を前提としています。法学は、その対立をどう調整するか、もしくはできないかを追求する研究です。そのためには多様な角度からの論議が不可欠です。とりわけ、立場の違う人との意見交換がなによりも大切です。この印刷教材を素材に活発な議論がなされることを期待します。

フランス語入門Ⅱ（'12）

放送大学教授（人間と文化）宮下 志朗　白百合女子大学教授（放送大学客員教授）中井 珠子

宮下 志朗 教授

中井 珠子 教授

みなさんのなかには、よしフランス語に挑戦するぞという学生さんもいれば、ずいぶん昔に勉強したけどすっかり忘れたという学生さんもいるでしょう。放送大学のフランス語は、「フランス語入門Ⅰ」（テレビ）と「フランス語入門Ⅱ」（ラジオ）で構成されており、テレビ→ラジオの順番に勉強すれば、フランス語の初級の知識を、実践的な形で身につけられるように設計されています。「フランス語入門Ⅱ」では、今回は、フランス各地のみならず、世界各地を訪れて、文化や人々の生活にスポットライトを当てるというコンセプトで構成されています。「今日の表現」でいくつかの文章をインプット、それから「会話」と「読み物」（メール、ブログなど多様な文が出てきます）という2つのパートで学んでいきます。たくさんの「練習問題」、「ことば遊び」というおまけも付いてます。中井珠子、ジャニック・マーニュという、NHKテレビなどでお馴染みのお二人が相方です。ぜひ、チャレンジしてみてください。

食と健康（'12）

放送大学教授（生活と福祉）小城 勝相　東京大学大学院教授（放送大学客員教授）清水 誠

小城 勝相 教授

清水 誠 教授

ヒトは食品の機能によって生命を維持している。食品とは他の生物である。消化器で食品を糖、アミノ酸、脂肪酸などの部品（栄養素）にまで分解して吸収し、これらを原料として我々の体を維持・再構成する。地球上すべての生物で、その部品の化学構造が同じであるから食物連鎖が成立するのである。健康や病気の問題を考えるとき、「分子」を基礎にして考えるときに初めて正しい理解が可能になる。人体は約60兆個の細胞から成り立ち、さらにその1つ1つの細胞の中で何万という化学反応が進行している。これらの膨大な数の化学反応がホルモンや神経の作用によって適切に調節されていて初めて健康を維持できる。

本科目では、調節された膨大な化学反応の集積体としての生命の成り立ちをよく理解した上で、食品の機能、病気の予防、食の安全性などについて理解を深めることを目標としている。本科目により「食」を深く理解し、健全な食生活に生かされることを期待します。

地域社会の教育的再編（'12）

放送大学准教授（心理と教育）岡崎 友典　國學院大学教授（放送大学客員教授）夏秋 英房

岡崎 友典 准教授（左）と夏秋 英房 教授（右）

戦後日本の高度経済成長を支えたのは、戦後復興期の1950年に策定された、全国総合開発計画法に基づく地域開発政策で、これにより全国規模で人口の地域分布変動が起き、地域社会は再編された。

地域社会の教育力といった言葉が登場したのは、20余年間にわたる地域開発が、急激な人口の流動性を高める形で推し進められたことに起因する。

経済合理性・効率性優先の社会は、地域の人間関係、住民組織を弱体化させ、また形成させないまま、地域社会の人間形成の力（教育力）を奪ってきたといえる。

本科目が「地域社会の教育的再編」と題したのは、地域社会の存在を前提とせず、学校と家庭がそれぞれの役割、教育・養育機能を問い直し、地域社会をになう人材を養成することが地域社会の再生・創造につながると考えたからである。

教材の作成にあたっては、「地域教育」と「地域文化」を基本的な枠組みとして、全国各地で展開する教育実践が、地域社会を再編・再生させている過程を、具体的な事例で提示することに努めた。

ケースで学ぶ現代経営学('12)

放送大学教授（社会と産業）小倉 行雄　関西学院大学大学院教授（放送大学客員教授）佐藤 善信

小倉 行雄 教授

佐藤 善信 教授

本書は、放送大学の教材という枠の中で、ビジネススクール的な色彩を可能な限り出そうとした教科書である。そこで、経営の各論的なものを基にした専門にはあまりこだわらず、企業が抱える今日的な課題に焦点をあて、それを解くために必要となる基本的考え方やスキルに絞って検討することを重視した。また、「ケースで学ぶ」というタイトルの主旨についても説明しておけば、それは単に見かけの興味深さを増すためのものではない。むしろ経営領域における現実問題解決に関する理論の不十分さを自覚するがゆえに、今日的課題に対して理論はどう答えたらよいかをビジネスケースの検討のかたちで探るものといってよい。

こうした方向の書は、放送大学における学生の属性を踏まえ、とりわけそこで多くの割合を占める有職社会人の視点に立てば、彼らの学習ニーズによく応えるものであろう。

情報機器利用者の調査法 ('12)

放送大学教授（ICT活用・遠隔教育センター）黒須 正明　放送大学准教授（ICT活用・遠隔教育センター）高橋 秀明

黒須 正明 教授

高橋 秀明 准教授

この科目は、基本的には、情報機器やサービスの企画や設計を行う際に、それを利用する人々の特性を調査し、その結果を考慮して企画や設計をする方法論を学ぶ、という趣旨で開設されています。しかし、この科目は単に企画担当者や設計者だけを対象にしたものではありません。受講生の皆さんの多くは、利用者の立場で、パソコンや携帯電話、電子ブック、テレビやオーディオ機器などの情報通信機器を利用しているでしょう。この科目は、そのような利用者をも対象にしているのです。利用者の立場から、機器やシステムがどうあるべきかを考えることには次のような三つの意義があると考えられます。一つには、人間についての基礎的な学問である心理学などの知識を実践に活かすこと。次に、従来の科学技術観を見直すきっかけを与えること。最後に、これを練習問題として、皆さんが日常生活において抱えている課題を解決する方法を学んでいただくことです。

看護管理と医療安全 ('12)

神奈川県立保健福祉大学教授（放送大学客員教授）大島 弓子　順天堂大学大学院教授（放送大学客員教授）飯島 佐知子

大島 弓子 教授

飯島 佐知子 教授

現在の医療をとりまく社会の事象は、医療経済、医療のマンパワー不足、倫理的ジレンマなどの問題をもたらしています。このような中で質の高い看護ケアが、常に提供されることは、人々にとって安心で安寧な生活を保障するために重要なことです。この質の高い看護ケアの安定的な提供に必要となることの1つに、看護のマネージメントや医療安全があります。

この「看護管理と医療安全」の科目では、看護のマネージメントや医療安全について、基本的なことを学び、それを具体的、現実的に活用することが出来るようになることをねらいとしています。

「看護管理」では、おもに医療施設などの組織で働く看護職が専門職業人として、医療政策の変化に対応し、責任を持って働く姿勢を身につけるために必要な知識と方法を身につけることです。また、「医療安全」では、安全管理の考え方を学び、看護職に多い医療事故を防ぐための具体的な方法について、理解してほしいと願っています。

看護職以外の方々にも、この「看護管理と医療安全」についての学びは、物事に組織的に取り組む上で必要な知識や方法等、活用出来るものと思っています。

教育行政と学校経営（'12）

放送大学教授（心理と教育）小川 正人　東京大学大学院准教授（放送大学客員教授）勝野 正章

小川 正人 教授

勝野 正章 准教授

1990年代以降、特に、今世紀に入ってから、経済のグローバル化と国内外の産業・就労構造の再編等を背景にした社会経済や政治の構造改革の波が教育制度にも及び、教育をめぐる国と地方、官と民、一般行政と教育行政、教育行政と学校といった諸関係の見直しを含めて教育システムや権限のあり方そのものが問われてきている。いわば、新時代における学力や教育活動のあり方と学校の経営・管理やシステムそのものが大きな改革の対象とされ、学力や教育活動の有様が学校とそれを所管する教育行財政システムのあり方と一体的に論じられる時代になっている。その意味では、近年の教育改革は、名実ともに教育統治（ガバナンス）を主要なテーマとするようになったといえるのかもしれない。本科目は、教育統治（ガバナンス）の問題を、主に、教育行政と学校という視点を軸にして扱っている。教育行政や学校の関係者を中心に教育改革に関心のある方が、本科目を通して近年の教育政策や教育行財政システム、学校の経営・管理の課題を考えていく契機して頂ければと願っている。

産業立地と地域経済（'12）

東京大学大学院教授（放送大学客員教授）松原 宏

松原 宏 教授

2008年秋の「世界同時不況」、2011年3月の「東日本大震災・原発事故」、8月以降の「超円高」によって、産業の空洞化や地域経済の衰退が問題にされています。こうした変化の著しい地域問題に対処するためには、基礎理論をしっかり学ぶとともに、実態を正確に把握していくことが大切です。「産業立地と地域経済」の授業では、まず農業、工業、商業・サービス業の順で産業立地論の基礎理論と現代的な立地への応用、地域経済や地域経済循環の捉え方について学んでいきます。後半では、グローバリゼーションとローカリゼーションの局面に分けて、多国籍企業の立地や産業集積、立地調整とそれらの地域経済への影響を学び、最後に立地政策と地域政策の理論・歴史・課題を考えていきます。日本国内各地や中国取材のVTRをご覧いただきながら、また地図や図表で表現される内容を読み解きながら、立地と地域の理論と実態と政策をいっしょに考えていきたいと思います。

eラーニングの理論と実践（'12）

放送大学教授（ICT活用・遠隔教育センター）青木 久美子

青木 久美子 教授

eラーニングは、コンピュータや他の情報機器をインターネットに繋いで行う学習方法です。放送大学でもeラーニングを進める動きがある中、従来の放送授業の方式を主体に本科目を開講することに多少の矛盾を感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、できるだけeラーニングを学生が直に経験する機会も設けながら、皆さんが慣れ親しんでいるテレビ放送授業という形でまず本科目の授業を進めていきたいと思います。しかしながら、将来の放送大学の授業方式を模索する、という意味で、この科目では様々な学習方式を試行するテストベッドとしての役割も担っていきたいと思っています。インターネット技術が日々変遷し、新しいツールやサービスが開発され、皆のコミュニケーション形態や学習形態が変貌している中、教育や学習の在り方を学生の皆さんと考えていくことができたら、と思っています。

中国を語る

人間と文化コース・
文化情報学プログラム准教授　宮本 徹

このゼミは中国の言語文化を対象にしています。といってもその範囲はとてつもなく広く、また学生の皆さんの関心も多岐に亘ります。そんな参加者（私も含めて）が一堂に会するのは、「耳学問」が大切とおっしゃった私自身の先生の教えによるところもありますが、ともに「中国を語る」ことで、そこに生きた人間の知的営為を少しでもくみ取りたいというささやかな願いがあるからです。

●学生の声●

ゼミは2部構成で、前半は全員で近現代の文献を輪読します。音読と和訳、そして文法事項を整理し、著者の主張や執筆当時の時代背景等を確認します。

後半は、1か月間の研究成果を1人ずつ発表し、宮本先生から講評を頂きます。古典、表象文化、音韻学と院生の研究のジャンルは全く異なり、ただ「中国語」という共通項だけで繋がっています。このため、他の分野の専門用語や常識を理解できず発表内容を難し

2011年12月のゼミにて

いと感じることがあります。それでも臆することなく、講評後の意見交換の時間では、わからないなりの率直な感想や質問をお互いに投げ掛け合います。

ゼミを通じて思うのは、自分の主張や意見を明確かつ簡潔に相手に伝えることの難しさです。的確な表現をするためには、まずは先行研究を正確に把握すること。それには日々の地道な努力が必要であることを心に留めて研究を続けています。（修士2年　寺田ひとみ）

ゼミで意見交流

心理と教育コース・
人間発達科学プログラム准教授　森 津太子

大学院の学生は全国各地に散っていて一堂に会することが難しいため、年に数回の研究発表会を除き、主に個別相談のかたちで修士論文の指導を行っています。一方、卒業研究の学生には、月に1度、東京多摩学習センターに集まってもらい、研究の進捗状況を報告してもらっています。異なる人生経験を持つ仲間が意見を交換し合うことで、それぞれの研究に柔軟性や創造性が生まれると信じているためです。以下にご紹介するのは、2011年度の卒業研究履修生の声です。大学院の学生についても、最近はウェブ会議などを利用して、意見交換の機会を増やす方向で進めています。

●学生の声●

卒業研究履修にあたり、森先生からとても丁寧な指導で最後まで支えて頂きました。丁寧と言ってもそれは、自ら主体的に研究に取り組む姿勢を促すようなものでした。論文の完成までに、仲間同士発表と意見交換を繰り返し行いました。ゼミでは様々な立場の方々がそれぞれの研究課題を持ち寄り、仲間として同じ目標を持

卒業研究口頭試問後の打ち上げにて

つ事で、刺激し合い励まし合えた事が大きな力になりました。森ゼミでの卒業研究はとても充実した体験でした。（本郷 亜維子）

通信制である放送大学ではアウトプットの機会が少ないと感じていた私にとって、ゼミはその機会を補う貴重な場でした。特に、ゼミでは毎回、進捗状況を報告するというアウトプットの機会がありました。ここでは、他人からの指摘を受けて初めて気付くことや、自分では理解していたつもりが実は理解不十分であったと気付くことが何度もありました。一人では気付き難いことを気付かせてくれるという点でもゼミは貴重な場でした。（今井 敏彦）

全国の学習センターには様々なサークル・団体が所属しています。今回は、学習センター全体のレベルアップに貢献している活動をご紹介します。

宮城学習センター

学生のPCスキルアップを目指して

パソコンサークル代表 蝦名 眸

パソコンサークルの活動は、初心者と経験者の教室を毎週2回開催しています。毎学期入会してくる初心者には、先輩が定例教室の時間外にも指導し、数か月後には科目登録・Web通信指導を行い、放送教材をパソコンで視聴する学生も多くなっています。更には、面接授業やゼミのレポート作成、卒業論文の作成までも自然に出来るようになっています。

また、毎年、教室の成果としてExcel、Word、PowerPointで作成した作品展示会を開催し、今年も55点の作品を出品しました。作品制作のノルマのストレスを感じながらも、会員同士のサポートによりこれを乗越えると、スキルと共に40名の会員間の連帯感も急上昇します。パソコンサークル専用のブログも立ち上げ、会員間の連絡、行事の紹介・報告、時には学習センターからの行事紹介や諸連絡も行っています。

パソコン21台設置の実習室の利用が、サークル活動の原点になっており、感謝しているところです。

今後も、パソコンの操作やスキルアップを通して、一人でも多くの学生が楽しい学生生活を送れるよう、手助けができればと思っております。

パソコン教室風景

作品展示会会場の一場面

岐阜学習センター

ナビゲーターの活動

岐阜学習センター 全科履修生 青木 秀明

岐阜学習センターは、平成23年開設20周年の記念の日を迎えることができ、記念式典・記念祝賀会、各種講演会等に事務室からの依頼により、2月に学生実行委員会を設置し、多数の学生が手伝いをしました。その中に学生の発案による6月の記念祝賀会を盛り上げるため合唱団（男5名・女6名）を立ち上げたりしてまいりました。

その後、学生実行委員会からの要望により、手伝いをした学生の中から32名の希望者が、センター所長から、10月にナビゲーターとして委嘱され、現在活動中です。

在学生は、現在1,070名ですが、11月のナビゲーター勉強会において、平成24年の目標は1,200名とし、①まず、看護師さんには、准看護師を看護師に、看護師は大卒資格取得を目指しレベルアップを、②知人、友人にはボケ防止と知識の豊かさを、③消防士、警察官は特殊な専門学校卒業が多いので大卒の資格を、④教員の方々にはキャリアアップを、それぞれ体験に基づき口コミにより勧誘をしています。

在学生は、新入生から専門科目の選択の方法を聞かれても全て答えられないのが現状の様に考えられますので、ナビゲーターとしては、在学生にも認識をもって行動してもらいたいとの思いがあります。

岐阜学習センター ナビゲーター勉強会

岐阜学習センター 開設20周年記念交流会

和歌山学習センター所長　八丁 直行

学　習　セ　ン　タ　ー　だ　よ　り

グローバル化と地域おこしをキーワードに、和歌山学習センター

和歌山県は「木の国」とも称せられます。平野部は少なく、県内を走る国道425号は日本3大「酷道」の一つとも言われ、野生のサルとの遭遇を楽しめます。ミカン、梅、柿などは全国一の収穫量を誇り、黒潮が流れる紀伊水道、熊野灘の海からの恵みも豊かで、世界歴史遺産の高野山、熊野古道があります。

しかし、県民人口はついに100万人を割り、2011年10月には2度にわたり大水害に見舞われました。災害からの復興や東海・東南海・南海3連動地震への備え、地域振興が急がれています。

松下会館

和歌山学習センターは、市中心部の和歌山城から2kmほど南下したところにある、松下幸之助氏寄贈の築後50年経つ松下会館の中に、和歌山大学地域連携・生涯学習センターと一緒に入っています。駐車場を隔てて隣接するきのくに志学館（県立図書館）とともに、県民に生涯学習を提供する拠点となっています。

センターは、教室は30人規模のものが一つという、小ぢんまりしたものです。面接授業が2つ重なるときは、臨時にもう一部屋借りています。アメニティにやや欠け、学生さんは不自由さを我慢しています。

地域が抱える課題にチャレンジ

和歌山学習センターは、地域貢献と知名度向上のため、地域の課題をテーマとする公開講座を積極的に実施しています。2010年度は学長裁量経費の支援も受け、「和歌山　アジア新時代の地域力を問う」を統一テーマとする公開講座を3回実施しました。2011年度は、「わが町おこし・地域づくり―これからの時代をどう乗りきる―」を統一テーマとして、各都市を回る出前公開講座を実施しています。

地域の特色を生かした面接授業

さらに、科目全体のバランスに注意しつつ、地域の特色を生かした面接授業に取り組み、2011年度は、「梅学入門―日本一の梅の里で学ぶ」、「公開天文台で宇宙を感じよう」他を実施しました。2012年度は、「食品の機能性―梅と健康―」、「和漢薬と華岡青洲」、「清酒酵母開発と地酒造り」他を計画しています。

梅の里で学ぶ梅学入門

公開天文台

国際化、グローバル化も視点に

国際化、グローバル化の視点も重視しています。面接授業として「グローバル・マネジメント」、「途上国の課題とBOPビジネス」、「異文化交流で学ぶ環境と文化」他を企画し、「英語で国際交流 in マレーシア」は、現地のマラヤ大学に出向いて実施しました。

研修旅行もこの視点から取り組み、2010年度は「神戸発！ 世界を支える日本企業探訪」とし、2011年度は「世界に挑む日本の食の技」として、工場や施設を視察旅行しました。

英語で国際交流 in マレーシア

研修旅行

同窓会と緊密に連携しながら

2010年に結成された同窓会は40数名足らずの小所帯ですが、学習センターと連携しながら年1回の会誌発行や講演会、「ふるさと探訪」と称する小旅行、パソコン講習会など、活発に活動しています。

このように、和歌山学習センターは地域の特色を生かしつつ文化、教育、健康、産業経済等に関わる先端テーマを、身近で、易しく、面接授業や公開講座等で取り上げ、実施しています。センター職員はいつも笑顔で、学習その他の相談に、学生さんの立場に立って誠心誠意対応することを心掛けています。

和歌山学習センター
和歌山市西高松一丁目7-20（和歌山大学松下会館）〒641-0051
JR和歌山駅から約20分　南海和歌山市駅から約20分
電話:073-431-0360

みんなの学び舎・徳島学習センター

充実した学習環境

徳島学習センターは、平成24年に設立14年目を迎えます。当学習センターは、徳島市新蔵町の徳島大学本部にある地域・国際交流プラザ（通称：日亜会館）の3階にありますが、センターから西へ約52kmの美馬市福祉センターと南へ約50kmの美波町日和佐図書・資料室の2か所に再視聴学習施設もあります。

徳島学習センター教職員

徳島県立図書館との連携講座

徳島県の人口は約78万人ですが、学生数は701名（0.090％）です。また徳島市の人口は、約26万人で市内の学生数は319名（0.12％）です。全人口に対する学生数の割合は大変に多い県でもあります。また、徳島県立図書館は、蔵書の多さでも有名で約130万冊の蔵書があり、県民一人あたりの貸出冊数は、都道府県立図書館でも最も多いと言われています。

このような背景もあって、平成20年度から当センターと徳島県立図書館が共催で、月一回「まなびの森」と銘打って講演会を開催しております。講演題目は、“裁判員制度”や“子育て”など話題となっているもの、さらに貸し出されている多い分野の中からテーマを選び、12月には必ず「地震」関係の講演を実施しています。現在は、3年目を迎えている講演会も県民に定着した感もあって、参加者数は毎回50名程です（定員60名）。

まなびの森講演会（阿波踊り体操）

学習センターでの減災対策

徳島県は、昭和21年12月の南海地震で津波によって多数の死傷者を出しております。今後30年以内に地震の発生率は60％と予測されており、さらに東海、東南海、南海地震の3連動まで予想されています。県レベルでも対策を立て他府県との広域訓練も実施してきていました。しかし、当学習センターでは地震・津波対策を立てておりませんでしたので、図書の配架棚やロッカー備品類の固定、防災頭巾の配備、さらに震災・減災マニュアルの作成を計画していたところでした。その矢先に今回の東日本大震災が発生しましたので対策を見直しているところです。

学生交流の場「課外活動」

学生間相互の交流の場として欠かせないのが研修旅行やサークル活動、今年度から学生有志によってアロマ・サークルが設立されました。日本には伝統的な“お香の文化”がありますが、ストレスの多い現代社会にあってアロマに癒し効果があるでしょう。学生達には人気のサークルとなっています。末筆になりましたが、こちらに来られる機会がありましたら、お気軽にお立ち寄りください。

学生研修旅行（尾道）

アロマサークル

徳島学習センター
徳島市新蔵町2-24（徳島大学日亜会館3階）　〒770-0855
徳島駅下車徒歩約15分　電話：088-602-0151

東京渋谷キャンパス(仮称)開所と東京世田谷学習センター閉所のお知らせ

学習センター支援室

東京世田谷学習センターは、平成24年3月をもって閉所します。それに伴い、平成24年4月から東京都渋谷区に東京渋谷キャンパス（仮称）を開所します。渋谷駅から徒歩約5分という「近くて、便利なキャンパス」をコンセプトに、放送授業の再視聴・面接授業・履修相談等を行い、また早朝や夜間の面接授業や、ビジネスパーソン向けの新しい企画など、様々な試みを行ってまいります。

東京渋谷キャンパス（仮称）
住所：渋谷区道玄坂1-10-7 五島育英会ビル1F（JR渋谷駅徒歩約5分）

夏季集中科目の学生募集が始まります

広報課

夏季集中放送授業期間に「学校図書館司書教諭資格取得に資する科目」、「看護師資格取得に資する科目」を開設します。学生募集等の日程は下記のとおりです。

	学校図書館司書教諭資格取得に資する科目	看護師資格取得に資する科目
学生募集要項配布	2012年4月1日(日)～	2012年4月1日(日)～
出願受付期間	2012年5月1日(火)～5月31日(木)	2012年5月1日(火)～5月31日(木)
放送授業期間	2012年7月22日(日)～8月8日(水)	2012年7月22日(日)～8月8日(水)
通信指導提出期限	2012年8月17日(金)	2012年8月17日(金)
単位認定試験	2012年10月19日(金) (単位認定試験レポート提出期限)	2012年9月28日(金) 2012年9月29日(土) いずれか1日を選択

夏季集中科目の受講を希望する方は、大学本部広報課又は最寄りの学習センターまでご連絡ください。この要項はご連絡いただいた方のみに配布します。
在学生が履修を希望される場合にも科目登録申請要項（夏季集中型専用）を入手して、必要な手続きをお願いします。

2012(平成24)年度大学院 文化科学研究科(修士全科生)入学者選考結果

教務課

修士の学位取得を目指す大学院修士全科生に407人が合格しました。

プログラム名	生活健康科学	人間発達科学	臨床心理学	社会経営科学	文化情報学	自然環境科学	計
募集人員	90人程度	60人程度	40人程度	120人程度	120人程度	70人程度	500人
出願者数	119人	104人	361人	114人	113人	64人	875人
合格者数	78人	50人	32人	101人	92人	54人	407人
倍率	1.5倍	2.1倍	11.3倍	1.1倍	1.2倍	1.2倍	2.1倍

※倍率は出願者数／合格者数

編集後記

放送大学の社会と産業コース「産業と経営領域」では、2012年2月18日（土）13時30分から東京文京学習センターにて「大学院ゼミ教育を考えるフォーラム」を開催した。これは同領域の4つのゼミの教員と学生が主体となり、放送大学大学院のゼミ教育の現状を出し合い、よりよいあり方を探るものである。当初の想定を上廻る多様な参加者があった。放送大学には、科目の幅広さや多彩な教授陣、多様な学生など何でもあるようにみえる。しかし、学生や教員がゼミの枠を超えて集まり、議論し、何かを生み出そうとするのは乏しい。この試みは、こうした欠落を埋める機会としてきわめて貴重である。是非とも放送大学の基幹的行事に育ってほしいと願うのは筆者だけであろうか。（小倉行雄）

ご意見やご感想をお聞かせください。メールアドレス editor@ouj.ac.jp

放送大学通信 オン・エア 編集委員（2011年度）

委員長　教授　松村　祥子
委員　教授　井上　洋士
教授　小倉　行雄
教授　高木　保興
教授　草光　俊雄
教授　本多　俊和
教授　松本　忠夫
教授　加藤　浩
准教授　岡崎　友典
編集事務担当　総務部広報課

放送大学
http://www.ouj.ac.jp/　ISSN 1343-3369